

JOMF 派遣医師便り (2014. 12)

◆マニラ◆

つらいけど医師にもかかれない、でも、とても優しい

マニラ日本人会診療所

菊地 宏久

- 2013年11月8日に巨大台風 Yolanda がフィリピン・ビサヤ地方を中心に甚大な被害をもたらしました。被災後、レイテ島やセブ島北端部での医療援助活動に数度参加させていただきましたが、1年経った今も医療援助の手は十分とは言えず、更なる対応が望まれています。今回はセブ島最北端の被災地 DaanBantayan の1年後について報告させていただきます。

2014年11月9日(日曜)早朝、セブ市から車で現地へ向かいました。きれいな水がまだ足りないとの情報を聴いていたので、途中で水や薬品などを購入して行きました。現場に近くなると山々のヤシの木は倒れたままで、山沿いに建つ家々の錆びたトタン屋根は半分吹き飛んだままの状態でした。台風直後は荒れ果ててでこぼこだった山道は所々工事でしたが、山間部に続く狭い山道車線では車がすれ違うたびに谷側に落ちそうになりました。4時間たった10時ころ DaanBantayan に着きました。ここは暴風雨にさらされ地域全体が大きな被害を受けた所です。「電気は通ったがきれいな水がなかなか手に入らない」、「衛生的な水がいつでも飲めるようになりたい」、「仕事が無くなり食料や生活必需品を買うお金がない、医者にかかる余裕はない」と将来の生活よりも明日の命を懸命に生きている状況だと感じました。

村の人々が集まったところで健康相談会を行いました。とても興味深そうに寄ってこられる人もいましたが、笑顔が少なく、力のない、健康に不安がありそうな方々が多くおられるのが気がかりでした。ほとんどの人たちは質素な服装で過ごしておられました。

ある40代の女性はひどく疲れた様子でした。「2-3か月前からひどく衰弱し、なかなか起きてこないし、とてもだるそうだ」と家族が話していました。徴候としては眼球結膜が黄染し、下肢は浮腫みが強く指で押すとへこんだままでした。そして腹部はパンパンに張って、歯肉から出血もしていました。症状から重症の肝不全を疑いましたが、「医師にかかる余裕はなく、台風後に一度も医師に診てもらっていない」とおっしゃっていました。

また50代の女性は「息切れがひどく動けない、横になるのが辛い、座っているほうがまだ腰が痛くてしょうがない」とひどくしんどそうでした。下肢に浮腫みがあり、心房細動も認めました。左胸部には心雑音拡張期ランブルも聴取され、僧帽弁狭窄症による重症心不全徴候だと考えました。日本であれば救急車を直ちに呼んで病院へ救急搬送すべき患者さんですが、「医師に診てもらうように」とアドバイスできる状況下でないのは誰にでも

わかりました。「塩分と水分の取り過ぎに注意するように」と伝えました。

「あちらの女性も診てほしい」と頼まれ山道を更に登って行きました。「首が縛られる、のどが苦しい」と訴えている 40 才くらいの女性がいました。10 年前から前頸部の腫瘍がだんだん大きくなり、最近呼吸がしづらくなってきたようです。赤ん坊の頭ほどの甲状腺腫瘍が首に存在しています。前にかがめば倒れそう、横になれば重さで気道が閉塞しそうな感じでした。だんだんに病態が悪化したようでしたが“病院に行くという選択肢”は彼女にはありませんでした。“ここが日本であれば・・・、診断を付けて適切な治療に結びつけることができるのに”、と悔しい思いでいっぱいでした。

村の人々は当初警戒してか、あまり御自分の体調のことを話してはくれませんでした。私のわからないビサヤ語で村人同士が話しているようにも感じました。しかし患者さん達の腕や足を触り、お腹をさすり、聴診しているうちに、言葉はほとんど通じていないのに、村人達の眼が優しく変化してきました。私が立ったまま聴診していると「疲れるだろう、ここに座って」と古びた木の椅子を持ってきてくれました。初めは体に触れられるのを警戒していたおばあちゃんも私が帰ろうとすると、ゆっくりゆっくり杖をつきながら歩いて来て、目を潤ませながら私の手をきつく握ってくれました。

この原稿を書いている今 2014 年 12 月 9 日も、今年の台風 22 号（ハグピート）が昨年 of 巨大台風 30 号ヨランダと同様の軌跡でフィリピンを襲っています。被害の詳細は不明ですが、（赤十字によれば）現時点で少なくとも 27 名が死亡、1000 棟の家屋倒壊、約 100 万人の避難者を出しました。

毎年のように大きな台風がフィリピンを襲っています。被災地のみなさんがお元気になれるよう、一日も早い復興を心よりお祈りいたします。

2014 年 12 月 9 日記